

資源とは何か？

—日本における資源論の系譜と展望—

2009.12.11

東京大学東洋文化研究所
佐藤仁

報告のアウトライン

1. 「資源」に惹かれた個人的契機
2. 日本における資源の概念史
3. 資源調査会を中心とする資源政策史
(そこで重視された考え方、資源論の特徴)
4. 「総合」の考え方と留意点

「資源」に関心をもった個人的背景

- 熱帯地域の森林保全と地域住民(タイ)
- 行政の断片化(農地改革と森林保全)
- 学問の断片化と「資源」という共通項



タイ中西部農村の風景



石井素介先生への聞きとり風景

- 日本の環境社会科学における「資源論」の再発見

資源概念の歴史と内閣資源局

■ 大正期初頭における資源概念の登場

■ 資源の政策化に向けた二つの水脈

1) 枯渇の危機感と保存

『富源保存論』と「風光」①

2) 統括・動員の流れ

■ 松井春生と戦前の内閣資源局 ②

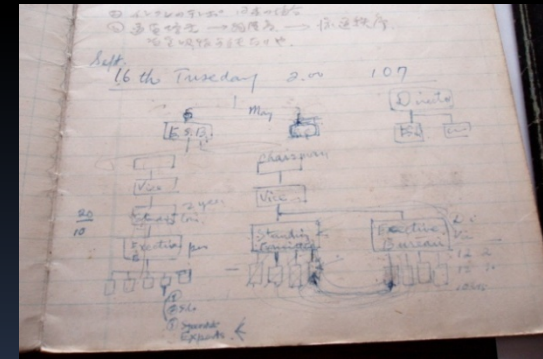


資源局長官時代の松井

■ 石橋湛山の小国主義的資源論

占領統治と資源調査会

- 「持たざる国」という虚構③
- GHQ、アッカーマン、資源委員会：
「内に向かう資源論」への転換
と統合的な計画(Integrated Planning)
- 部会の断片化と資源論研究会の
総論作成作業と資源の再定義
- 地域的文脈と社会経済的側面
への配慮 (e.g.,水没補償)



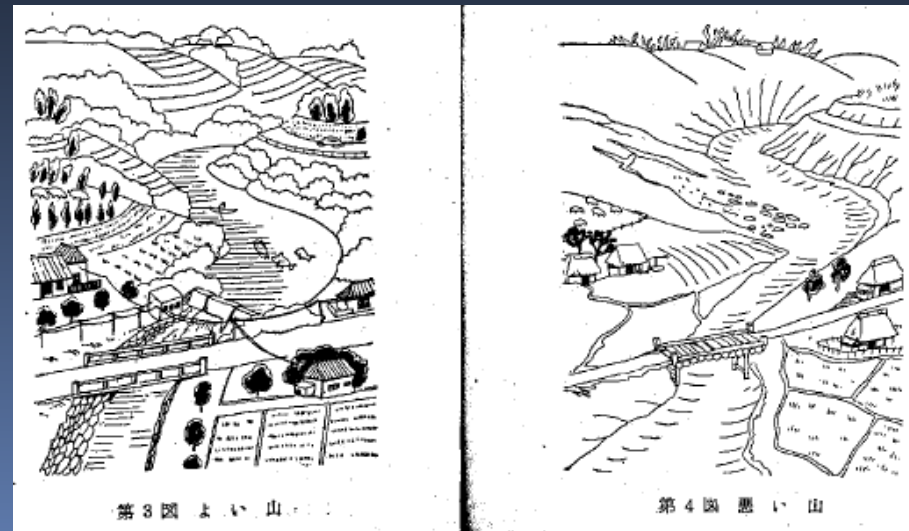
大来の日記にある資源委員会構想
(1947年9月16日)



「日本の国土開発と資源の最大利用：
将来の日本」(1949年、展示会@三越)

「総合／統合」の考え方

- 安芸皎一と河相の把握 ④
- TVAと民主主義：権力分散と民衆の参加 ⑤
- 都留重人と自然の一体性
一体性理解のための情報
＋制度的条件
- 自然のつり合いを理解して
災害を防ぐこと＝保全



天然資源(中学の社会、1951)

資源論の創成と忘却

■ 地理学における学問的資源論の発達 ⑥、⑦

■ 資源論の3つの特徴：

- 1) 資源問題を社会問題として位置づける志向性
- 2) 現場の特殊性把握を重視する方法論
- 3) 民衆の側に立ち、語りかける思想

■ 資源論の衰退と可能性

- 地理学における資源論の衰退と地域開発論への吸収
- 断片化と部分最適化の時代を超える持続性とバランスへの示唆

資源とは何か

- 資源＝原料(モノ)ではない。⑧
- 「人的知的と天然物的とが合体したもの」(都留)
- 「力を籍るもの」(『大英和辞典』(1931))
- 働きかけの対象となる可能性の束
- 総合の対象は、セクターだけではなく、担い手も含む。
「資源を見る眼」の統合が第一。

考えられる方策

- 地域という面的な単位に資源管理の権限を移していく。
- 総合的な資源管理の経済的なメリットを可視化していく。
- すでに行われている総合的資源管理の実例を取り上げ、体系的に支援していく（cf.森は海の恋人）。
- 総合的な資源利用に思想的推進力を与えていく。

まとめ

- わが国における資源論には、昭和初期の内閣資源局創設前後の時期を含めて豊かな議論の系譜がある。
- 歴史的に見ると、断片化に対するアンチとしての総合、そして再度の断片化(部分化)が繰り返されてきた。
- 戦後一時期の総合化の成功は、資源を軸とした理念・哲学が整備され、全体を見渡す余裕ができたことにもよるが、「不足の時代」状況が無駄を省き、総合化を強いた側面が大きい。
- いま、ふたたび「不足の時代」に突入しつつあるとき、忘れられた日本資源論の考え方を想起し、その理解を広めることで総合的な資源利用の推進を多少なりともスピードアップすることができるのではないか。